

MMCニュース 経営情報

2026年6月号

〒101-0051

東京都千代田区神田神保町 2-20

ワカヤギビル 504

<https://www.mmc-office.co.jp>

有限会社MMC

座席広げたプライベート 空間でゆったりと 高客単価にシフト

航空、鉄道各社が、広々としたシートや個室タイプなど新型の座席を相次いで導入している。「タイパ」を意識する人が増えたのを背景に、移動中にしっかり休息を取ったり、仕事を済ませたりしたいといった、需要の多様化に対応するためだ。人口減で乗客数の大幅な伸びが期待できないため、客単価を引き上げる狙いもある。

横幅2倍

全日本空輸は4月、国際線の中型機の座席を刷新した。エコノミークラスのリクライニング幅を1.5倍の約15センチに拡大し、快適に座れるようにした。ビジネスクラスのドア付き個室型座席は、横幅を2倍の約1メートルに広げ、乗客がゆったりと眠ることができる。

日本航空は、国内線では主要路線だけだったファーストクラスを、27年度から国内全路線へ拡大。ビジネス客や訪日客の需要増に対応する。

JR東日本が2027年春に首都圏～北東北で運行を始める予定の夜行特急列車は、全席を1～4人用の個室にする。室内の床は平面のスペースにもでき、足を伸ばしてくつろいだり、寝転んで休んだりできる。ビジネス客の利便性向上を図る取り組みもある。

JR東海は10月から、東海道新幹線で1編成あたり2室の個室を導入する。周囲を気にせず、オンライン会議に参加しながら移動するといった利用を想定する。

需要変化

新型座席導入の背景には、新型コロナ禍を経て、客層や需要が大きく変化したことがある。例えば、オンライン会議の普及によって出張客が減った一方、移動中もオンライン会議に参加したいという需要が増えた。こうしたニーズを拾い上げ、満足度を高められれば、乗客が減っても客単価を引き上げて収益を確保できる。「豪華な座席を設けることでブランド価値が向上する」との声もある。

競争環境や各社の稼ぎ方が変わったとの見方もある。東海道新幹線の個室は、03年に廃止して以来、23年ぶりの復活となる。廃止当時は、より多くの座席数を確保する方が収益につながると考えられていた。「かつては均質な座席でより速く、より多くの客を輸送することが競争の中心だった。今は多様化した需要への対応がより重要だ」という。

リーズナブルでも 満席率アップで稼ぐ

飲食店では1店舗あたり1000万円の月商をあげれば合格点と言われているが、決して簡単なことではない。

そんな中「沖縄料理やんばる新宿総本店」は3フロア(1F:券売機での定食中心、2Fと3F:居酒屋中心、11時～23時通し営業)の合計月商4000万円をあげている。その秘密は以下の通りと店側は語る。

- 客単価は昼:～1000円、夜:2000円～4000円
- 大テーブル、中テーブルを組み合わせる様々な人数での来店客に対応。2名様での来店客は大テーブルで横並び配置として、デッドスペース(空席)をなくす＝満席率アップ
- 沖縄料理は、通常の居酒屋よりも品数は8割程とな



りバリエーションが狭まるのが特徴。そのためリピート客にも飽きられないように、飲み物のバリエーションを広げて対処している。＝焼酎の割もの数を増やす等

高級感で客単価アップ or リーズナブルで満席率アップ
皆様はどちらを狙いますか？

一世を風靡した一流作家 その軌跡から読み取れるもの

「三毛猫ホームズ」シリーズなどの人気作で、エンターテインメント小説の世界を牽引してきた作家の赤川次郎さん(78)が、デビューから50年を迎える。ユーモア・ミステリーから社会を鋭く見つけた傑作まで、多彩な作品を手がけてきた作家の半世紀を振り返ってもらった。

「社会派」読まず

「過ぎてしまえば、『こんなものか』と思います。書くのが楽しかった。土日も、休みもないし、好きじゃなければ続かない」。日付が変わってから机に向かい、手書きで朝まで書き続ける。そのスタイルを貫いてきた。

サラリーマンをしていた1976年、「幽霊列車」で推理小説新人賞を受けてデビューした。松本清張をはじめとする社会派全盛時代に、異色のユーモア・ミステリーだった。海外のミステリーには親しんできたが、国内の推理小説事情には疎かった。「社会派の作品はほとんど読んでいなかったので、『珍しい』と言われて逆に驚いた」

その2年後には、社会派ミステリーの傑作を数多く生んできた光文社の「カッパ・ノベルス」から『三毛猫ホームズの推理』を刊行し脚光を浴びる。長年飼っていた愛猫をうしない、「どうせ出すなら、主人公にしてやろう」と探偵役に据えた作品はヒットした。他社からも依頼が殺到し、専業作家となった。映画化もされた『セーラー服と機関銃』などからは、読者層はさらに広がり、小学生からもファンレターが届くようになった。「小説を読むことで大人の世界をのぞくこともありますから、書く姿勢や中身は気にしない。でも、難しい表現と易しい表現があれば、易しい方で、小学生でも分かる文章にしようとは思いました」

「三毛猫ホームズ」「三姉妹探偵団」など、シリーズ作品は20を超える。読者ととともに主人公が年齢を重ねていく「杉原爽香(さやか)」シリーズは、第1作では中学3年生だった主人公が、50歳を超えた。

「基本」外れても

シリーズを書き継ぎながら、単発の作品では意欲作を手がけてきた。忠誠を誓うことを拒み、国を去った作家をめぐる『さすらい』や、権力の闇を描

いて吉川英治文学賞を受けた『東京零年』といった作品で、現代社会に警鐘を鳴らす。「作家である以上、言いたいことは小説の中で言うのが基本だと思っている」と語るが、「でも、それでは間に合わなくなるぐらい、世の中がおかしくなっている。いま発言しておかないと、間に合わなくなることもある」。『三毛猫ホームズの遠眼鏡』などのエッセーを通して社会のあり方を見つめるのも、この作家らしい。

「これが小説だ」

半世紀の中で、電話などの道具は少しずつ移り変わる。イベントを開くと、3世代で参加するファンもいるという。それでも作家は歩みを止めない。

「書いているものが世の中に合わなくなったら、やめる時なんでしょう」と笑った。「でも、いま起きていることを常に眺めていれば、問題がない時代はない。『これが小説だ』と思うものを書いていくしかない」

「4人」で回しているような・右肩上がりの熱気 先輩の使命

西村京太郎さん(2022年、91歳で死去)、森村誠一さん(23年、90歳で死去)、内田康夫さん(18年、83歳で死去)。数多くのミステリーを手



がけ、赤川さんとともにノベルスブームを先導してきた人気作家が、近年、相次いで世を去った。一世代下の赤川さんは、「4人で順繰りに書いて、各社のノベルスを回しているようでした」と懐かしそうに振り返る。

「競争心をエネルギーにするタイプだった」という森村さんは、折に触れて赤川さんを「戦友」と評した。若い頃にヒット作が出ずに苦労した西村さんには、「赤川くんは、ボツになったことがないでしょう」と何度もからかわれた。でも、「ライバル心はなかった」という。「僕は好きなことをやっていただけでしたから」

1970年代から80年代にかけては、様々な出版社が文庫市場に参入するなど、業界全体が右肩上がり成長していた。その熱気の中で、ひたすら書き続けた。「新人の本を出すために、売れている人は頑張る。それが先輩の使命だと思っていました。あんな時代はもう来ないんじゃないかな」

出典:読売新聞「文化」2026.5.26



MMCホームページ



YouTube



10キロやせました

<https://www.mmc-office.co.jp> 検索「MMC神保町」